



## 京都・大藪遺跡

所在地 京都市南区久世殿城町

調査期間 一九九八年度調査 一九九八年（平10）七月～

九九年四月

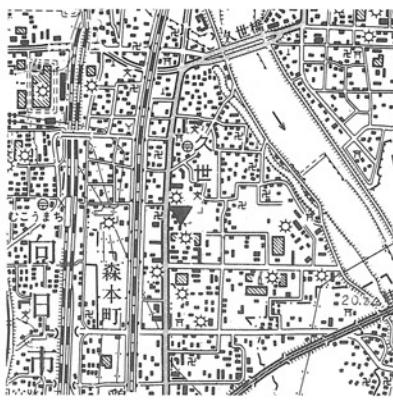
発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所

調査担当者 吉崎伸・出口勲・西大條哲

遺跡の種類 集落跡・居館跡

遺跡の年代 弥生時代後期、奈良時代末、中世（一四世紀末）～  
一六世紀、近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（京都西南部）

大藪遺跡は、京都盆地西部を南流する桂川右岸の沖積平野に位置し、標高一五m前後の微高地上に立地している。縄文時代から近世に至る複合遺跡である。  
調査は、京都市の街路建設に伴うもので、検出した遺構は弥生時代後期の集落、

長岡京期の建物、中・近世の集落（居館）などである。

中・近世の集落は、条里の坪境にあたる東西方向の堀の北側に展開しており、掘立柱建物や礎石建物・井戸・土坑などを数多確認した。これらの遺構は、五〇～六〇mおきに配置された南北方向の溝によつて、いくつかのグループに区画されている。東西方向の堀は、幅約六・〇m深さ約〇・八mで、調査区のほぼ中央を東流しているが、調査区の中ほどでいったん南へ屈曲して調査区外に延び、約六〇m東で再び元の位置に戻つてゐる。すなわち、北側の土地が南側へ張り出した状態になつてゐる。この部分には堀と並行して内堀と考え方られる溝が「匂」の字型に配置されている。その内側は建物や井戸などが最も密集しており、内堀と堀の間には門と推測される礎石建物も認められる。こうした状況から、ここには集落の中心的な居館があつたものと考えている。

今回紹介する木簡は、居館を巡る堀の江戸時代の堆積層から出土した位牌である。ここからは、土器類の他、木製品も多く出土している。また、石製の硯が出土し、裏面に「七」などの線刻が認められる。

## 8 木簡の釈文・内容

(1)

「  
天保四癸巳  
蓮室妙来信女靈×  
」

七月六日

(210)×65×7 061

位牌は縦長の柾目の材を用いており、頭部は角を落として丸く納め、下部に向かって僅かに幅をせばめている。下端は欠損しており、下部右側には腐蝕のため穴があいているが、保存状況は良好である。表裏、側面ともに丁寧に削つて仕上げてある。墨書きは三列認められ、中央上部に梵字キリーグ、その下に戒名が大きく書かれ、右側に年号、左側に月日がそれぞれ小さく書かれている。戒名から女性の位牌と考えられる。

（吉崎 伸）

